

Fast life, Slow life.

村越 真

「全然スローじゃないよ」と言われる僕の生活も、膝の故障のおかげ?で5月は若干ペースダウン。いつもはトンボ帰りのIOF理事会も、場所がノルウェーだと気分が随分違う。留学中の金並由香とデートで、さらに付加価値アップ!

4月23日

久しぶりに渋谷で走る会に参加。静岡では雨が降っていたが、到着時の東京は曇り。どうやら雨雲を追い越してきたらしい。トレーニングを終えるころになって霧雨状態となる。

SARSの影響で香港から帰ってきたヨルクやいつものメンバーで食事。夏のスイスでの世界選手権前に行うトレーニングキャンプの相談に、ヨルクに乗ってもら。彼はいつものようにフレンドリーな表情で、「僕はチューリッヒとラッパスビル(世界選手権の開催地)の間に住んでいるし、友達も沢山いるから大丈夫。多分ヘルパーを見つけることができるよ」と言ってくれた。昨年のトレーニングキャンプでは、地図にそたくさん用意されていたものの、どのレーンにもフラッグは準備されておらず、コーチや選手で分担して設置撤収した。随分トレーニングにも制約を受けたものだ。選手を強くするために練習に徹する体制を作らなければならない。また、周囲のサポーターを巻き込むことが、自分たちの使命感を高めるためにも役立つはずだ。ポジティブな人との会話は、自分の気持をポジティブにしてくれる。これまで、何度スイス人にそうやって助けられてきたことだろうか。い

4月24日

IOF理事会のためオスロに出発。いつもはヘルシンキで開催される理事会だが、今回はノルウェーOL連盟の招待で、オスロで開催。移動時間は3時間長くなるが、ノルウェーは親しみ深い国だし、帰りにコペンによって金並とデートという付加価値もつけることができる。

今回の理事会の目玉は、IOF委員ヘイデリ氏によるスキージャンプの解説。IOF



▲ IOF重鎮の面々。右より会長スー・ハーベイ、中央は副会長オーケ・ヤコブソン、左は理事レーホ・ハル็ดナ

Cのプログラム委員会で2006年の五輪種目にならなかったのかの説明だ。理由はいくつかある。一つは若者に支持されている競技かという点だ。観客やマスメディアへのアピールを種目採用の重要な指標にしているIOCとすれば、これは当然の論理だろう。もう一つはスキージャンプが国際的な種目とは見なされなかった点だ。参加国の数こそ25という基準は満たしているが、北欧、せいぜいヨーロッパのスポーツと見なされている。確かにフットに比較すればスキージャンプではオセアニアの参加も北米の参加も乏しい。せいぜい日本が継続して参加しているに過ぎない。

表紙に堀江の写真が大写しになっているスキージャンプのブロースレットの意図もそんなところにあるのだろう。聞けば聞くほど日本の果たす役割の重大性を感じさせられる話だ。

25日の夕食はノルウェー連盟の招待で、ジャンプ発祥の地として有名なホルメンコーレンのジャンプ台そばの、街を望むホテ

ルの食堂で。前菜はサーモンのパテを海苔でつつんで醤油ベースのソース。15年も前にトロンハイムで、てんぷらをノルウェー人にご馳走したことを思い出す。

ノルウェー人と話す時には、たいてい山の話で盛り上がる。「イギリス人はパブへ、ノルウェー人は山へ行く」という小話があるくらいだ。IOFのスキージャンプ委員会の委員長コーレは、当時世界選手権があれば確実に世界チャンピオンになっていたと考えられているオーガ・ハドラーとイングリッド・ハドラー夫妻の友人で、一緒に氷河歩きに出かける予定だったという。よく一緒にいく仲だが、イングリッドの甥がベッテル・ツウールセンで、同行することがあるという。こういう話を聞くと、きつい登りで確実に離されてしまうとき同様、「北欧人には敵わない」と思う瞬間だ。

ディナーで隣の席についたのは元ノルウェー会長だった。マスターズでハル็ดンにきた後、しばらくノルウェーで過ごしたいという、じゃあ僕の別荘に来たらという。



▲ライドゥンの家の朝食にて。外は0度に近い。

ヨーロッパ最大の高原であるハーダゲルと北ヨーロッパ最高峰の連なるヨーテンハイメンの間にあるファーガネスに彼の別荘がある。友達づきあいのあるルーシー・ペームが97年の世界選手権前に来てしばらくトレーニングを積んだ場所でもあるという。ルーシーはその世界選手権でショートのチャンピオンになった。「世界選手権の準備をするには絶好の場所だよ。敵わない」と思っていることは、案外すぐそばにあることなのだ。

26日

夕方早くに会議は終わった。最初からその晩の夕食はキャンセルしてあった。それをみて、オーケ（副会長）は、「シンはティオミラにいくんだろう？」と思ったという。なんだ、知っていたら、そうしたのに。

実際には、オスロ空港そばに住む20年来的付き合いのある友人ライドゥンを訪問するためだ。初遠征の時、北極圏のナルビクからまで延々3日間電車・フェリーでウィーンを目指した時に、車内で知り合って以来の友人だ。家族同然の関係というより、その直前に交通事故で息子をなくしている彼女にとって、僕は息子同然の存在かもしれない。

彼女は英語があまり得意でないのに、いろんなことをしゃべるわけでもない。それでも彼女は、「おなかはいいいないか？」「ケーキを食べないか？」と気を遣ってくれる。あたかも食べ盛りのころの息子の姿がいつになっても脳裏から消えない母親のように。祖父母の家にいるときのような心む時間である。

27日

昨日まではノルウェーでも春の訪れを感じさせる気候だったが、一晩明けてみると、芝生の上にはうっすらと雪が積もっていた。

出発のころには本格的な降り方に変った。薄暗い部屋の中から雪の降り積もる春の田園を見ていると、内省的な気分になる。

ガルデモエン空港からコペンハーゲンへ。早めに宿についたので、保存緑地になっている荒地のなかの自転車道にジョグに出

かける。デンマークは全く自転車の町で街中の主要道路には必ず自転車レーンが切っである。驚くことに、近郊の電車でさえ自転車持ち込みはOKなのだ。果てしなく平らな自転車道を2時間ジョグ。

28日

スウェーデンのルンドに留学中の金並由香を尋ねた。初めての街だが、友人が暮らしているというだけで、親しみを感じるものだ。スウェーデンでも屈指の古さを誇る大学町の雰囲気にも親しみを感じる。充実した本屋が多い。

大聖堂の前で待ち合わせて、しばし歩きながらおしゃべりした後、リンネの銅像の前で記念撮影。「カール・リンネリウス」という学名のような銅像の碑銘が笑える。オープンサンドとケーキで軽く昼食をとって、駅まで送ってもらって別れた。海峡を横断する橋の完成で、今ではスウェーデン南部はデンマークの一部のようになっていて、ルンドもコペンからたった50分ほどの距離にある。帰りの電車が架線故障の影響で運休になり、バスに振替輸送で、空港についたのは、飛行機出発の1時間前だった。

5月3、4日

地図調査。見通しが悪くて、じめじめして、急な尾根・沢が入り組んでいる下山（インカレ）を半年やった後では、作手は天国にも匹敵する。天気はいいし、斜面の下の方の田んぼからは田植え準備の耕運機の音が聞こえてきて、のどかな気分になる。森林作業中のおじちゃんはむっちゃフレンドリーだし、林の中から垣間見える農家の庭先では、子どもたちがバドミントンに興じている。この世の極楽とはまさにこのこと、桃源郷にいるかのような気分だ。

もともと、この季節の地図調査は好きな方だったが、ますます好きになった。

5月11日

2週連続の地図調査。山川の厳命で、GPSを担いで、5月中旬から来るアレックス・ターのためのGPS原図作成することになった。GPS調査とは、GPSを使って、原図には出ていない道や特徴物の位置を高い精度で測量してくることで、実際の調査の時間の短縮と精度の向上を図る調査だ。通常の調査のように地形や特徴物の解釈で悩むことがないので、スパスパ進む。5kgのGPS受信機を背負っての調査は調査というよりむしろ体カトレーニングといったほうが適切だ。そのつもりで1日半ばりばりと山を駆け回っていた。

そして雲行きが怪しくなった二日目の昼過ぎ、突然データ記録機がピーという音を立てて作動しなくなってしまった。半日分のデータもパー。調査をしていて、これほど悲しい瞬間はない。

その不幸も、実は幸運だったのかもしれない。というのも、GPS調査は締め帰宅して、夕方のトレーニングをしてみようとすると、右ひざの内側に、これまで経験し



▲リンネ先生の銅像の前にて（スウェーデン、ルンドにて）金並由香撮影

たことがないような痛みを感じたのだ。右ひざは昨秋から調子はよくなかったが、走ると痛みが消えるようなものだったので、あまり気にせずトレーニングをしてきた。それが、今回は、一瞬だが、続けば確実に吐き気を催しそうな鋭い痛みだった。さらに一歩すらも走ろうという気にならない痛みだった。

その痛みは、翌日も消えることはなく、その時点で、長期化することが予想できた。荷重した時の痛みかたから、おそらくそれが、頸骨と大たい骨のあたっている部分の傷らしいものが原因であることと推測できた。チームドクターの小林君に相談し、また同僚に紹介してもらい多くのサッカー選手も手がけたという整形外科にもいって、MRIまでとって、診断した。

結局のところ原因は何かよくわからなかった。それからほぼ3週間、十分に走ることができない時間を過ごし、さらに抜歯、おそらくそれに由来する腰痛、次々と身体が悲鳴をあげ、走ることを許してくれない。もっとも練習に集中する予定だった、5月はそうやって過ぎていった。

奇妙なことに、そして幸いなことに、1週間を過ぎたあたりから、スピードを出して走る以外の運動はほとんど全て支障がなかった。注意深く荷重すれば、サイクリングマシンはおろかうライミングマシンも大丈夫で、なんとスクワットマシンまで大丈夫だった。それで心拍数が160まで上げられれば、ほとんど普通にトレーニングしているのと変わらない。これだけ辛い思いをしているのだから、いい結果が出ないわけがない。常にそう自分に言い聞かせて、5月を過ごした。もし5月11日に丸一日調査を続けていたら、こんなことではすまなかったかもしれない。

5月14日

遠征中の高橋より手紙が届く。ストックホルム駅でパソコンを盗まれ、ハートレートモニターの情報の取り出しができない。不便で仕方ないので、東芝のリブレットを購入し、それにハートレートモニターの読み取りソフトをインストールし、使える状態にし、できればエクセルとワードも入れ、ハードディスクも買って送ってほしい。

おいおい、CD-ROMドライブがついていないリブレットにソフトをインストールをするのは一度ネットワークに接続して、CD-ROMドライブ用のドライバをインストールして、と大事なんだぜ、それを忙しいこの俺にやらせようってのか？リブレットとハードディスクを買う十数万を立て替えるっていうの？

でも、高橋はきっと、ハートレートモニターのことを持ち出せば、コーチである僕がいやとは言えないと読んだはずだ。計算づくでわがままが言えるようになれば、選手として一流である。プリプリしながらも、

彼のこの夏の活躍が楽しみになった。

5月18日

冠婚葬祭週間であった。19日は週間プレイボーイのインタビューで東京へ。翌19日はJOA鈴木氏の通夜で横浜へ。予想通りの甲斐外交。さらに23日は静岡県オリエンテリング協会会長の河畑氏の叙勲記念で東京へ。そのまま週末はハケ岳の合宿へ。合宿では、満足に走れなかったので選手のやらせ写真をとって楽しんでいた。同じコントロールに何度もアタックさせて「いい、インターバルトレーニングだろ？」。どんな時にも楽しみはあるものだ。

6月1日

5月30日は、世界選手権のチーフクラスミーティングで愛知へ。翌31日は、東大会前日で集まる役員と小田原でミーティング。だが、悲しいかな翌6月1日は大会参加ではなくて、東京でJOAの理事会と総会である。

JOAの総会なるものに初めて出席した。話に聞いていたがその非生産的な議論には改めて驚かされる。現在JOAはほぼ年間200万の赤字を続けている。2000万円あった振興基金もこのままでは2年程度持てば上出来。口では語る危機感が、行動の中にちっとも見えてこない。その事実を直面しただけが出席甲斐のある総会であった。

その後の理事会はもっとひどい。全国各地より多額の旅費を費やして理事が集まっているというのに、事務的な連絡のみの30分もかずに理事会は終了。とても危機感のある組織の理事会とは思えない。その惨状は、これまでに聞いていたが、これからは自分がそのストレスと戦わねばならない。

6月9日—13日

アドベンチャーレースの後、実験の助手として連れ帰った宮内は、雨にもめげず実験をこなしてくれた。研究室の学生とも仲良くなって、「村越先生」がどんな先生かを、あれこれ聞き出したらしい。1週間も一緒にいると、彼女の生憎がよく分かって面白い。京大の許田には、なにかの折に、「宮内さんの細やかなところ初めてみた」と言われ、男子更衣室の体育館で着替えていたら、後輩から「宮内さん、少しは気を遣ってください」といわれたけれど、基本的に彼女は細やかな奴なのだ。細やかな神経を持っていなければ、こんなに短期間でトップになれるはずがないのだ。

14、15日

赤城での合宿。アドベンチャーレース



▲ハケ岳の合宿にて。映画スター？ナショナルチームの円井選手。被写体がいいのか？カメラマン（村越）がいいのか、見つめている対象（田島利佳）が魅力的なのか？3者譲り議論が展開した。

時の腰痛もなんとか消えた。9日の月曜日に接骨院にいったのが効いたらしい。喜んで走っていたら、せっかく治りかけた右ひざの違和感が復活したが、なんとか合宿も走れそう。最近鍼灸士の免許を取った、アリ（宮本知江子）に針を打ってもらおうと、あら不思議。痛みがほとんどなくなってしまった。もともと針は効く体質だったが、それにしても凄い。渡航費出すから、世界選手権に来てと冗談半分に言っていたが、その夜腰痛に針を打ってもらって、やつぱり速攻で解決してしまった落合志保子が、「村越さん、私も5万円なら喜んで出します」といったので、即決した。

僕が負担する20万円は、ベストを尽くすという自分自身への宣誓費用でもある。

久しぶりのオリエンテリングで、技術はがたがただったが、その分、一つ一つを修正し、だんだん形になっていくプロセスが味わえる。坂本を連れたランオブでは、1番で大ミスして、スタートに戻ってやりなおす。今度はプランを明確にし、一つ一つの技術を意識しなおして、きれいにコントロールへ。坂本は、滅多に見えない貴重な対比を見れたと、分かっているだろうか？

最後のリレーも思わぬウムスタートで、紺野の抜きつ抜かれつの展開。やつぱり走れるのは楽しい。